

[普及事項]

成果情報名：ニホンジカの捕獲候補地である越冬箇所環境特性

研究機関名 林業研究研修センター 環境経営部

担当者 長岐昭彦・菅原悠樹

[要約]

ニホンジカの捕獲候補地である越冬箇所は、平坦地や南～西斜面の緩傾斜地に形成されやすく、積雪深が高い冬季ほど標高の低い箇所に形成された。また、少雪年はササ・ハイイヌツゲ等常緑植物の多い広葉樹林内で、多雪年はツル性のフジ・落葉高木のウリハダカエデの小径木が多い林縁や萌芽伸長の認められる伐採跡地で越冬し、これら嗜好性植物を集中的に採食していた。

[キーワード]

ニホンジカ・越冬地・斜面方位・積雪深・冬季採食植物

[普及対象範囲]

県内陸部を中心とした積雪地域

[ねらい]

近年、県内全域で目撃数が増えているニホンジカ（以下、シカ）は、生息数が激増する前に捕獲などの対策を講じる必要がある。積雪地域では、餌植物が埋雪し採食箇所が限られることから越冬箇所を形成すると推測される。また、群れでの定着も予想されるため越冬箇所は捕獲候補地と考えられる。そこで、積雪期に糞や食痕（植物の採食痕）の分布や量を調べて越冬箇所を特定し、立地環境や採食植物、林相など環境特性を明らかにした。

[成果の内容及び特徴]

- 1 シカが目撃が多い田沢湖周辺で2019-2022年の積雪期に、踏査ルート上に連続した調査区（10×2m）を設け、区毎に糞・食痕などの痕跡状況や、斜面方位などの立地環境を調べた。約4,000haの調査範囲内に毎年4～5箇所（0.4～6.5ha）の越冬箇所を確認した。
- 2 調査地最寄りの角館気象観測所の最深積雪から、2019-20年（52cm）は少雪、20-21年（105cm）、21-22年（128cm）は多雪とした。糞の存在した区の割合（以下、糞有区率）から、多雪2カ年（20-22年）は主に平坦地や南～西斜面の緩傾斜地で生息していた（図1）。
- 3 標高区別の糞有区率を年別に比較すると、少雪年（19-20年）は標高301-350mを中心に標高の高い箇所でも生息し、多雪年（20-21年、21-22年）は主に標高の低い箇所に生息していた（図2）。
- 4 越冬箇所の採食環境は、少雪年はササ・ハイイヌツゲなど常緑植物の多い広葉樹林で、多雪年はこれら常緑植物が埋雪するため、フジ（ツル性植物）やウリハダカエデ小径木の多い林縁や河畔林、萌芽伸長した伐採跡地等であり、これら嗜好性植物を集中的に採食していた（表1）。
- 5 確認できた越冬箇所では、森林総合研究所東北支所や自然保護課など関係機関と連携して捕獲を試行している。

[成果の活用上の留意点]

- 1 積雪量が少なく積雪期間の短い海岸に近い地域では、雪による採食箇所の制限が少ないため、特定の越冬箇所を形成する可能性が低く、対象地域は主に内陸部の積雪地域に限られる。
- 2 シカの糞や食痕は外観ではカモシカと区別がつかないため、市販のニホンジカ・カモシカ識別キットを用い、シカであることを確認する必要がある。

[具体的なデータ等]

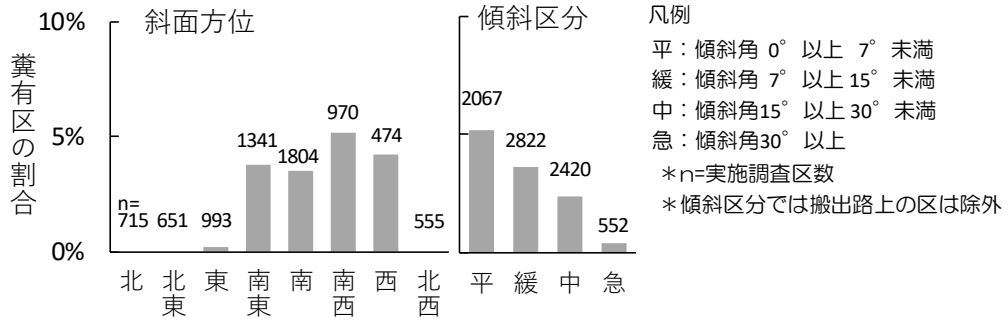


図1 多雪年(2020-22年)積雪期における斜面方位・傾斜区分別の糞有区割合 (糞の存在区数/対象調査区[10×2m]数)

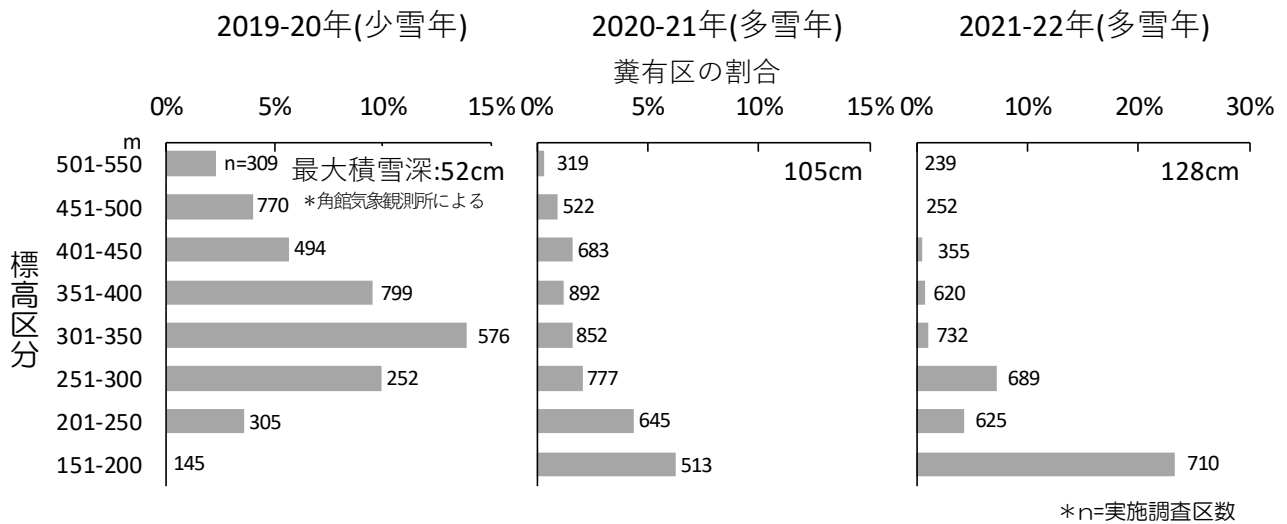


図2 積雪深の異なる冬季における標高区分別の糞有区割合 (糞の存在区数/対象調査区[10×2m]数)

表1 積雪深変化に応じた越冬環境の特徴

積雪状況	越冬箇所の積雪深(cm)	地形と標高域	林分環境	主な採食植物と部位
少雪	約30cm未満	尾根(平坦地～緩傾斜)を主体とした中～高標高域	・広葉樹壮齡林 ・上記林分とスギ壮齡林や伐採跡地の隣接地	・ハイイヌツゲ ・ヒメアオキ ・ササなど常緑植物の枝葉
		低標高の沢地形(平坦地)を主体に中標高の一部の尾根や斜面	・林床に小径木の多い広葉樹林 ・萌芽伸長した伐採跡地とスギ壮齡林の隣接地 ・河畔林 ・スギ壮齡林の林縁	・ウリハダカエデ ・イタヤカエデ ・ミズナラなどの小径木の樹皮 ・フジ(ツル性植物)の樹皮(軟性) ・ミズキの小径木の樹皮
多雪	約100cm以上	低標高の沢地形(平坦地)に集中定着	・林床に小径木の多い広葉樹林 ・河畔林 ・スギ壮齡林の林縁 ・上記3林分で越冬箇所の隣接スギ若齡林	・上記落葉樹種やフジに加え、コナラ、クリ、ハウチワカエデなど多種広葉樹小径木の樹皮 ・スギの樹皮(上記の嗜好植物と共に採食、スギ単独の採食は未確認)

[その他]

研究課題名：ニホンジカの個体数を制御するための生息環境の解明

研究期間：平成30年度～令和4年度

予算区分：県単

掲載誌等：秋田県林業研究研修センター研究報告第31号(2024)